

寅彦邸と文学碑

寺田寅彦記念館友の会会員 梅澤俊一

高知ペンクラブ（会長・岡林清水高知大学名誉教授）が創立20周年を記念して寺田寅彦文学碑を小津町の寅彦の旧邸に程近い桜馬場の北隅に建てることになった。この旧邸宅が現在の寺田寅彦記念館の礎になっているが、この桜馬場は寅彦が幼少のころの遊び場であつたらしい。

私はペンクラブ会員ではなかったが、この建立について、岡林会長から呼びかけがあり、自然科学を学ぶ一員として賛意を表していた。

平成2年10月7日に文学碑の除幕式が行われることになったが、その日が近付いたとき台風の進路と速度が懸念されだし、とうとうその当日に土佐湾に向かう公算が大になった。しかし、発起人代表の岡林会長の式辞にあつたように「天災は忘れたころにやってくる」の警句を思いながら、寺田寅彦先生の文学碑除幕への一同の祈りが通じたのか、その日の早朝に台風は土佐湾を避けるように進路を東北東に変えて南縁を通過した。このように、式当日は朝方には天気が回復し、晴れ間の靨く秋空の下で式が行われた。まさに、奇跡的で、天佑というべきか、巡り会いの不思議に手を合わせたのである。

実は、その数日前に発起人会幹事の永国淳哉さん（日米学院理事長）から発起人会の意向として私にお祝いの言葉を述べるようにとの依頼を頂いた。もちろん、私よりもふさわしい方がおられることと固持したが、ふとある思いが浮かんできて、思わず引き受けることになってしまった。

寺田寅彦先生の名前が強く印象づけられたのは、北大に入学した時に新入生歓迎の講演会で中谷宇吉郎先生のお話を聞いた時である。中谷先生は寺田先生の高弟で雪の結晶を世界で初めて実験的に作った人であるが、文筆の面でも師の薫陶よろしきを得たのか優れておられた。昭和19年10月のその日その時、6年後に高知に来ることになろうとは夢にも思わずに中谷先生の講演に耳を傾け、寺田寅彦先生に畏敬の念を抱いたのであつた。

私は昭和25年8月に高知大学に赴任した。そして、小津町の文理学部の宿舎に住まいして、寺田寅彦先生のお墓が割と近くにあることを知り、早速にお詣りをした。その後も幾度となく、高知を訪れた知人を案内したことであつた。

ところで、その翌年の7月ごろ私を高知大学に招かれた蒲原稔治先生から、「急な話だが」と相談を掛けられた。つまり「市役所の人から理科系の若い先生の推薦を頼まれた」ということで、それは「寺田寅彦邸の一部（二部屋とおふろとトイレは新設する）に無償で住み込み、留守番かたがた見学に来た人の案内役を務める」というのである。

見学者への対応には平日なら当然妻が当たることになる。とにかく、妻と相談をした。寺田寅彦先生の邸をお世話することは、願っても叶えられることではないと心が動いて、入居の時機を尋ねてもらったところ、夏休み中にでも入居してほしいとの意向であった。

それには困り果ててしまった。そのころ妻は身重で9月中旬が出産予定であったので、引っ越しは無理である。あと半年ぐらい後ではいかがかときいてもらったが、それでは遅すぎて駄目であるということで、やむなくお断りすることにした。

さて、高知大学文理学部の沢村武雄先生は京大出身の地質鉱物学者であったが、寺田寅彦先生の研究に啓発されて、昭和21年の南海地震の予後（医学用語であるが、筆者があえて、なぞらえて）に重大な関心を持たれて、「西南日本外側地震帯の活動と四国およびその付近の地質・地殻運動との関係」を研究され、高知大学に地震観測所を作られ、その検潮所を浦戸湾孕（はらみ、高知市孕東町57）に設置された。この地は「孕のジャン」として有名であり、寅彦全集に「怪異考」として収録されている。かくして沢村先生は寺田寅彦旧邸の復元の会長として募金運動に務め、完成に尽くされた。それが現在の寺田寅彦記念館に至っている。

寺田寅彦邸の見学とお墓に参詣することを条件に高知大学に特別講演に来られたのが南極観測で有名な永田武先生で、昭和61年8月15日に実現、それはその当時、高知大学事務局長の岩山安成さん（須崎市出身）がかつて極地研究所の事務部長をされていたときの研究所長が永田先生で、また高知大学の何人かの若手教官が南極観測隊員として続くように参加していた繋がりもあったからである。岩山事務局長ほか理学部の数人でお墓にご案内したとき、永田先生はしみじみと「私は寺田先生のお葬式の時に学生で受け付けをやった最後の弟子です」と話されたことが、今も強く印象に残っている。

寺田寅彦先生の名前が出ると、すぐに思い出されるのが、田中茂穂先生である。今ではあまり名が知られていないが、土佐出身の世界的魚類学者で、蒲原稔治先生が東京帝国大学の学生時代から師事した先生である。その田中先生が晩年に暫く高知に住まわれたことがあった。その機会に高知大学に非常勤講師をお願いしたので、私もしばしばお話を伺うことができた。

あるとき、田中先生は「寺田寅彦と私とは一中（現追手前高校）の同窓生であったが、彼は成績が一番で、私はどうしても一番になれなかった」と話されたことがあった。田中先生はもちろん優秀な生徒であったことで、一高・東大の秀才コースを進み、博学多識であったが、ある人の言うところによるとイゴッソウで、故郷のために「歯に衣着せぬ」一言は土佐にはうけなかったようである。それでも、蒲原先生は寺田先生のようになんとか田中先生を顕彰（功績

などを世間に知らせること)したいと努力されたが、それが報われないままに、恩師の田中先生より2年前に亡くなられてしまった。

ともあれ、明治41年10月5日の新聞「土陽週報」には「理学博士寺田寅彦君—新たに学位を授けられたる—」の見出しで「大学院規定の5年間を以て博士号を獲得したる者は恐らく君を以て嚆矢(*こうし、物事の最初)とすべし。博士の趣味の多方面なることは驚くばかり……。俳句を善くし小説を善くし油絵を善くし音楽は特にバイオリン、ピアノ、尺八等を善くす。雑誌『ホトトギス』を読める者は博士が如何に文才を有するかを熟知するならん。……博士の如き県的一名物(*古語、すぐれた人)というべし」と、称えている。

* (筆者注)

(2011. 7. 10)